幼児の教育　第87巻　第11号　昭和63年11月1日発行（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN　0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1988 11

お茶の水女子大学
昭
H2.10.3
受
附属図書館

第 87 巻　第 11 号　日本幼稚園協会

見る目を育てる実践シリーズ

全5巻

監修・編著
森上史朗（日本女子大学教授）
大場幸夫（大妻女子大学教授）
吉村真理子（松山東雲短期大学教授）

第一巻「子どもを見る目」
第二巻「保育実践を見る目」
第三巻「保育計画・形態を見る目」
第四巻「保育の現在を見る目」
第五巻「問題行動と障害を見る目」

保育の本質をしっかり把握するためには、「子どもを見る目」「保育を見る目」を養わなければなりません。本シリーズでは、実践例を通して、わかりやすく「見る目」を解説していきます。

全5巻・A5判・平均228ページ・定価各1,700円・セット定価8,500円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

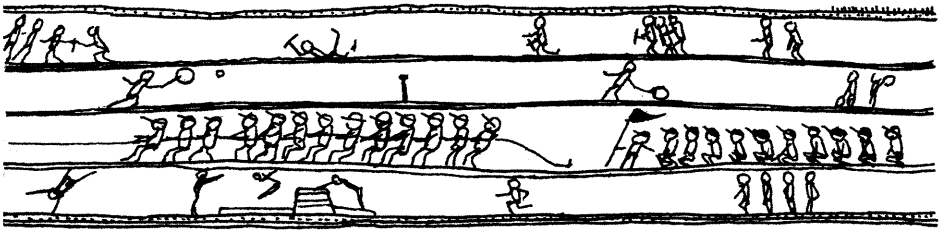
第八十七巻　　第十一号

幼児の教育　目次

——第八十七巻　第十一号——

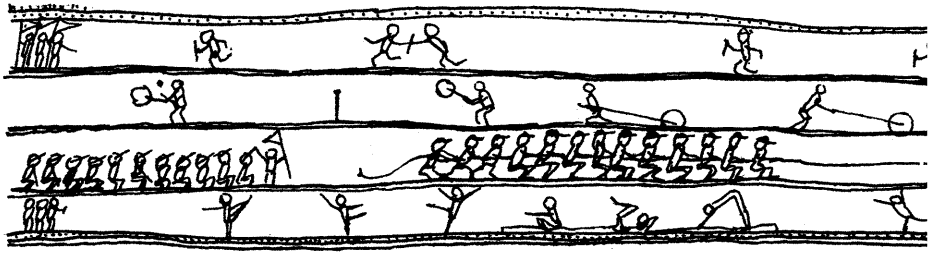
〈巻頭言〉
「幼児とのはからい」を……河邉　杲…（4）
目標……津守　真…（6）
SF的読み解き　子どもという風景
第四十三回　子どもの領分（テリア）……堀内　守…（12）
子どもと(8)
十一月・ひなた……清水　光子…（22）
子どもに発明・発見をさせる幼稚園
——アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園

© 1988
日本幼稚園協会



Child Development Laboratoryでの実践（3）――……結城（田村）恵…（28）
イギリスだより
立教英国学院の子どもたち……小野　英子…（37）
昆虫の世界
夏から秋へ　2……小島　賢司…（44）
臨床の現場から　子育てを考える　その5
年長年少のうそ――家庭内の人間関係の縮図――……飽田　典子…（48）
若いお母さんたちへ
最新東京子育て事情――私の場合――……はるにれの会　鈴木貴志子…（56）

カット・福田　理恵
編集部・向山　陽子



〈巻頭言〉

「幼児とのはからい」を

河邉　杲

この夏、蕪村の句集の中に「風鈴や　花にはつらき　風ながら」という句を見つけてはっとした。私自身、風鈴の澄んだ音色に魅せられて、東北への旅などで南部鉄でつくられた風鈴を買って帰る。夏にはそのいくつかの風鈴をあちこちにつるしてたのしむのだが、気に入る音色をみつけるのに困って終う。困るといいながらそれをたのしんでいる節もある。

しかし、いまだかつて、生命みじかき花の心にまで想いを寄せて風を感じ、音色に耳を傾けたことがなかったことに気づかされた。

ひとつのことに興味や関心を抱くとそれに夢中になって、まわりの風景に目や耳をかさないことが多い。ましてや、物や人の心に及んではなおのことである。注意を集中させるとか興味の中心に心をかよわせると言っても、その対象のまわりをうとんずることではない。

現代の人間について、自然や環境との遊離が問題にされて、まわりへの心くばり気くばりが弱くなって来ていることを指摘するのは、この蕪村の心境や姿勢から遠ざかりつつあるのを感じるからではなかろうか。「心くばり」というよりも、もっとまわり

の世界とつながっている自然さから言えば、ほんとうの意味での「はからい」とも言うべき心づかいなのではなかろうか。

このことは身体の方からも言える。寺田寅彦の随筆「手首について」の中で、バイオリンやセロのよい音色は、弓による弦の振動だけでなく、手首の働きも重要な要素であり、それも考えてみると「心の手首」が自由に柔かく弾力的であることが必要だと、自分の体験から説いていることからもうなずける。

古くから心や身体の柔軟さはいろいろな形で説かれて来ているが、自然との融合が弱くなればなるだけ人間はバラバラになってしまうと考えると、心や身体の柔軟さも、自然との融合と無関係ではなさそうである。

幼稚園教育要領が改訂された機会に新鮮さをとりもどし、真の幼児教育のあり方を求めて創造的に前進していきたいと念願するのだが、教師が目標や経験内容だけにこだわっての熱心さだけでは決して前進していかないことは火を見るよりも明らかなことである。それは幼児の教育が「幼児の生活」を第一義とするからであろう。幼児の生活に即応しての目標や内容への熱心さでなければならぬのだが、事実はどうなっているのか。発達の一般論理に照らしてのみ考えていて「幼児の世界」のことを考えていると思い込んでいないだろうか。

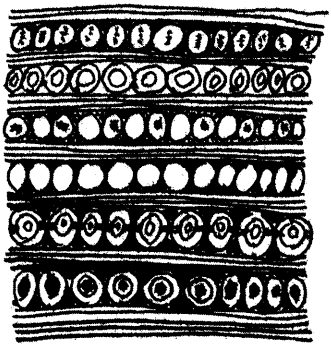
そのためには、私たち教師自身が、心や身体の自然なる働きを柔軟にして「幼児とのはからい」に大いに心を致したいと思う。

ギリシャ時代より教育は「概念くだき」だと心得られて来ている。私たち幼児教育にかかわる者自身がこの辺で「概念くだき」をする必要を痛感するのは私だけだろうか。

（洗足学園短期大学）

目標

津守　真



後向きに歩く

その子は、ごく小さいときから後向きに歩いた。学校のベランダの手すりに沿って後向きに歩くのを好んだ。庭の真中でも後向きに進むことが多く、その割には物にぶつからないで方向を変えた。つまづくとひどく怒って大人にしがみつき、いつまでも機嫌がなおらなかった。

最近、学校から泊りがけの小旅行をしたとき、宿舎につくと、部屋の前の細長くつづくベランダを、手すりに沿って後向きに歩いた。はしまでゆくと次には前向きに走り、また後向きに歩くことをくり返した。ベランダの数段の階段も後向きにおりるのだが、決して振り向かずに何度ものぼり下りした。ときどき足をふみはずすと、ウェーと泣いて私にしがみつき、安定を求めた。再び足を地面におろすとき、そろそろと注意深くおりる。私は宿舎に入る前の小一時間をこの子と過ごしながら、後向きに歩くことはこの子が幼児期か

らやっていたことだったと思い出した。

後向きに歩くとき、自分のゆこうとする目標を背中で直観的に感じているのかとも考えたが、そうではないらしい。小学校六年生になったこの子は、食堂にゆくときも半分大人に手をひかれて道路を歩くが、どこにゆくかという目標意識ははっきりしていない。大人が目標へと誘導してゆく。

手短かにいうならば、この子は目で目標をきめて歩くのではなくて、足もとの触運動感覚で位置をきめて歩いているのではないかと思われる。その足もとの空間が安定していれば、全体が安定するが、突然足を踏みはずすと、この子の世界全体が不安定になり、よりかかる大人を求める。こんなことを母親に話したら、この子はどこにいっても、階段を上り下りすると、新しい場所でも安定するんですと語ってくれた。この子の生活している世界は、身体が直接にふれる空間と考えていいようである。

○食物を手で払う

この子に食物を食べさせるときも、スプーンを口もとにふれるようにすると口をあけて食べる。このごろスプーンの食物をみると、やたらに手をふりまわし、うっかりするとスプーンや皿が数メートル先までとんでしまう。だからレストランの食堂で大変に気をつかう。はじめは食べたくないから食物を手で払うのかと思ったが、丁度赤ん坊が物に手を伸ばしてつかむようになる前に、うまく目的物に到達しないでやたらに手をふりまわすとき

に似ている。多分、これから自分の手で食物を口にいれて食べるようになるのだろうと思われるが、体も大きく力も強いから、それができる環境をつくるのは容易でないだろう。

○求める心

この子はいま、明瞭に認識されてはいないが身体の触運動感覚での求める心が生まれつつあるように思われる。一日、道路を歩いて売店のある広場にいった。この子は売店の中を私の手をひいて歩きまわったので、私は周囲を気にしてすぐに戸外の広場に連れ出し、数十メートル離れた駐車場まで誘っていった。すぐにこの子は後向きに駐車場の縁石に沿って一周し、後向きのまま階段をのぼって広場にゆき、直ちに売店の中に入っていった。薄暗い内部を壁に沿って私の手をひき、後向きで歩きまわり、更に暗い更衣室の中で立ち止まり静かにあたりを見回すと、この子はすっかり落着いた。売店の椅子で私の膝に坐ったかと思うと数分まどろんだ。あとできくと朝軽い発作があったそうで、この子は薄暗い内部の空間を欲していたのだと思われる。求めることがあったとき、ただ機嫌がわるくなるだけではなく、後向きのまま売店までもどったことを考えると、身体運動感覚の水準での漠然とした目標意識があると考えられる。まだその途中なのだが、ここまで至ったのには、この育てにくい子どもが少しでも快く生きられるようにともちこたえてきた、長い年月にわたる家庭と学校の生活が背景にある。この小旅行のひとこまもその中の一日で、あと何年かの後にはこの子の目標意識はもっと明瞭になるだろうし、そうなったときには、

身体運動感覚の水準での目標意識をもちはじめたこの時期のことは忘れ去られてしまうに違いない。

後向きに歩くということから、ひとりの子どもの身体運動感覚の世界とそのひろがりについて述べた。一緒に手をつないで歩きながら、私が当然と思っているのとは違った世界に住んでいる子どもが厳然として眼前にいることをあらためて知らされる。以下に述べることは、この子の世界とは別に、このことから私が考えることである。

生活の流れ

ここに述べたような子どもを、食事、就寝など日常の生活の流れに誘うのはしばしば容易でない。毎日を子どもと生活を共にしている母親や保育者は、子どもの小さな自発的行為を見逃さず、子ども自身が欲したのであるかのように大人の目標にさそう。こうして大人も自分のやり方を変えながら、子どもとの間で一緒に日常生活をすすめる仕方をつくり上げている。私はこれはたいせつなことだと思う。子どもは気付かぬうちに母親の生活にひきこまれて、生活人となっている。

普通には、子どもは幼児期から児童期のうちに、ともかくも大人と共通の日常生活の流れをつくってゆく。

そうなると、母親は、日常の生活圏をこえて、社会人としての自分の目標を子どもに対して設定するようになる。いい学校にいれたい、いい点数をとらせたい、いい会社にいれ

たいというような。この段階に至ると、母親の目標と子どもの目標とが著しくずれてくる。子どもには子どもの能動性から生まれる目標があり、そこではこの両者はもはや混同されてはならない。大人にとってどんなに高尚な目標であっても、子どもが自分で選びとらない限り、子ども自身の目標とはならない。そして、大人には思いもよらない世界が、傍で生きている子どもの中にいつも開けているのだ。この他者の異質性を認めた大人と子どもとの関係が、生活の流れをも、よりよくつくってゆくのだと思う。

教育の目標

前方の目標に向かって歩くことは大人にとっては当然でも、そうなるのには、はいまわり、手でさわって身近な空間に習熟してゆく身体運動感覚の体験が前提になっている。その点からいうならば、ここに述べた子どもの世界は異常ではない。だれでもが通る道をゆっくりと長い時間をかけてやっているにほかならない。どちらにゆくのかも分からない手さぐりの体験の中から、自分にも他人にも必要なことが次第に見えてくる。

保育の実践を考えても、毎年それをくり返している。今年の四月から夏休みまで、私は新しい子どもたちをかかえて、クラスのそれぞれの子どものことがわかるのに手さぐりのような時期を過ごした。そして次第にひとりひとりの子どもの成長のために必要なことが明瞭になってきた。その期間を経ないで四月のはじめに教育目標を立てることなど不可能なことだし、無理にそうしたら大人の一方的な目標になってしまうだろう。教育目標を持

たなければ教師とはいえないと、戦後四十年間いわれつづけてきたが、その前提としての教師と子どもとの関係をつくり上げる混沌の期間があまりに無視されていたのではないだろうか。子どもが自らのアイデンティティをつくるのを助けるのが教育なのだから、教師の目標と子どもの目標とは当然違うのである。それぞれの子どもが日日を生きる足もとの目標を見つけ、それを実現できるようにするのが教育である。教師の目標に向かって子どもを一直線に進ませようとしたら、子どもは自分自身が何であるのか分からなくなってしまうだろう。

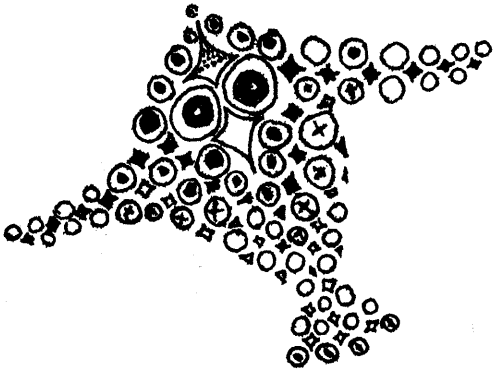
遠い目標は、人間と物事の本質につながるものでなければならぬ。日日の生活の多くの部分は手さぐりの労苦である。それが遠い目標とどのように結びつくのかは、日日にあっては明らかでない。その毎日を充実させ深めるところから、着実な目標が生み出される。「一日の苦労は一日にて足れり」というのは、目標と直線的に結びつくことによって一日は価値を生ずるのではなく、手さぐりの労苦の一日自体に意味があることを述べているのではなかろうか。

（愛育養護学校）

第四十三回

子どもの領分（エリア）

堀内　守



ネーミングと命名

転換期の時代には、思いがけないことが次つぎと起こってきます。そのため、人びとはとまどったり、面白がったり、先走ったりします。

いままでなかったできごとが生まれ、それにナマエをつける。以前なら「名づけ」とか「命名」と表現していたのに、いまやその行為までが「ネーミング」というように表現されます。新奇な名前が増えていくだけではあ

りません。それに名前をつける行為にどう名前をつけるか、も変わっていくのです。

とはいえ、「ネーミング」をもって、「命名」のシャレた表現であると割り切ることもできません。ちょっと見ると、単なる言い換えのように見えながら、何か余分なものがそこにつけ加わっています。もちろん、目には見えません。今日、ハヤリのことばで表現すれば、「付加価値」がつけ加わっている、とでもいったらよいでしょうか。

「小間物屋」というようなナマエは姿を消してしまいました。「小間物」とは、化粧品や装身具などの細かいことをさしていました。「コマモノ」という音は悪くありません。たぶん「細」にも「濃」にも通ずる感性を秘めたものだったのでしょうね。別名では「あらもの」ともいいました。「荒物」と書きます。品物の種類から見ていくと、「コマモノ」と「アラモノ」は違いました。「小間物屋」と「荒物屋」は、店の構えも違い、その店の風情も違いました。

今日、あちこちで見かけるようになった「ブティック」(時には「ブチック」という表示もあるようです)は、直訳すれば「小間物屋」に近いはずですが、そんなことを口にすれば笑われること必至です。

まちがいではない、それなのに笑われる。

なぜ？　理由は明白です。「ブティック」は、以前の「小間物屋」とは似て非なる存在として登場したからです。前の経歴をいったん消した履歴書のようなものです。そして、「前歴」よりも「現在」を精いっぱい発散していこうとしているのです。

以上は、「命名」と「ネーミング」の違いにもそのまま当てはまります。つまり、意味の上においては限りなく等しいように見えながら、人びとの心に喚起するイメージにおいてはまるで違うのですね。たとえていえば、「命名」は「前歴」をずーっと引きずっており、生年から生誕地、本籍から出身校、職歴から学歴、家族構成までずらずらと書き並べてあるような履歴書に相当するとすれば、「ネーミング」は、名刺です。しかも、シャレ

た紙型に、シャレた活字で、デザインしてある。

子どものエリア

同じようにして、子どものエリア（領分）について見てみましょう。

子どもは変わったか、変わらないか。そういう見方は、何とでも答えられるような見方です。変わった面もあります。変わらない面もあります。何がどう変わったのか、何がどう変わらないとか、こちらこそが大切なのに、あまり納得いく説明があまりない。これは、意識と行動の違いを世代の問題としてしかとらえられないためでしょう。

今日のような、日常生活を取り巻くメディアの数々が、ひとつひとつの感覚を根本から変えてしまうような時代になると、世代の差などといってはいられません。

これを世代によって切ってしまうと、切ったその先の時代については何もわからなくなってしまいます。変わっただの、変わらないだの、よりも、いまや、子どもや若者だけでなく、すべての世代の人が影響を受けているのです。

子どもとエリアの関係を見るときに、風景や風物とだけ関係づけただけでは足りません。風味、風情、店舗、交通、天候、人情等も、それこそ新しい意味をもって組み替えられなければなりません。

マス・プロダクションとマス・セール、それにマス・コンサンプション。それは、経済の高度成長の時代に急激に登場した考え方でした。日本中を一つの大きな器と考え、そこにいかに効率的に物で満たすか。その考えは経済の領分だけに浸透したのではありませんでした。

それは、子どもを含めて、おとなまでをこの流れに巻き込みました。そして、いつのまにか物の見方、感じ方、生活のしかたにいたるまで、マス・プロ、マス・セール、マス・コンサンプション化していきました。子どもも偉大なる消費者に仕立てあげられたわけです。

時間をかけて形成されてきた風土や風格や風情は根こそぎにされ、全国が単一のローラーにかけられてしまい

ました。均らされてしまったのです。

安全と楽しみと、自我の達成というような面は、こういう均一化のなかでは影響が薄くなります。生活ということ、どこに住んで、どのような暮らしをするか。歴史的にも、地理的にも、身をもって経験できるような手ごたえを与えてくれるような風格をもっている地域はどこへいってしまったのか。

「住む」をとらえる

子どものエリアを切り口にしてまわりを見た場合、「住む」ということについて再解釈することが必要になってくる。「住む」とはさまざまな活動の複合と組みあわせの集積であるが、その多くは慣習という地味な行動に支えられている。居住集積といいます。

子どもがどういう生活行動をしているか。

子どもがどういう消費行動をしているか。

子どもが人びととどのように接触しているか。

子どもが物とどのように接触しているか。

子どもが情報とどのように接触しているか。

子どもが……とどのように接触して……。

以下、このようにしていくつでも問いは立てられるのですが、大事なのはこれらの問いのすべてを「住む」という同一の基盤の上で構成して見ることなのです。

おわかりですか。

右の問いの列のなかに「接触」ということばが出てきました。軽く見れば「タッチ」、重く見れば「出会い」「かかわり」、さらによく眺めていくと、「取り込み」「とりつき」等の境地も見えてきます。つまり、「住む」という観点から整理していくと、子どもが「いる」ということから目がしだいに転じていって、子どもが何を「している」かが問題になってくるのです。

それを少し整理してみましょう。

まず、従わざるをえない環境条件があげられます。

(1) 自然条件（地勢、季節、気候など）

(2) 歴史的条件（伝説、風俗、慣習など）

(3) 文化的条件（価値観、しきたり、生活、スタイ

ルなど）

(4) 産業構造（生産、流通、販売の制度と体制など）

以上の条件をあげていくと、地域的差異がきわ立ってきます。これらは、人びとの生活様式や思考様式にも変化を及ぼしています。

これに加えて、さらに、より柔軟な情報的な条件もあげておきましょう。

(1) 人間関係（血縁、地縁、利害関係など）

(2) 収入源

(3) 商品購入の場所、慣れた、便利な

(4) 交通機関の利用、足まわりの確保

(5) 肉体的負担。歩きまわれる範囲

(6) 時間。使える時間

さて、これらを丹念に調べていってみましょう。何だか、「子ども」の姿がまだよく見えてこないようですが、もう少しがまんしてごらんになってください。

私たちは、デザインの美しい「名刺」をつくるつもりではなく、もっと根の深い「履歴書」、いや、もっとなまなましい「住むこと」をとらえ、そのなかに子どもを浮上させようとしているのですから。

日常行動の空間の広さ

調査の手続きなどは一切省略して、結論だけを申しあげます。

「住む」を中心に調べていくと、私たちの日常行動の空間はおよそ左のように描けます。

(1) 歩く範囲内では、半径五〇〇～一〇〇〇メートル内が、いちばん多い。

(2) 歩く時間は二〇分以内がいちばん多くて、長くても五〇分までとどまる。

(3) 一日のうちで、買いものに出かける時間は、午後一時から五時までのあいだに集中する。

(4) 週休二日制が行われているところでは、人びとの行動は土曜日を中心にして決定されている。

(5) 人びとの動きは、新しい地域であればあるほど動きの波は大きく、古い地域であればあるほど動きは小さ

くなる。

(6) 人びとの動きの選択のもとになる条件は、ぶらぶら歩きのできる歩行環境があるかないかによって左右されるが、飲食店の良否（便利さ）によっても左右される。

(7) 地域における人びとの行動の特徴は、生鮮食料品店・書店・薬局等の質によって判断される。

(8) 人びとの買いものの範囲と選択は、車の利用度によって決まる。

(9) 自家用車を利用した行動圏は、子どもの年齢とともに変わる。

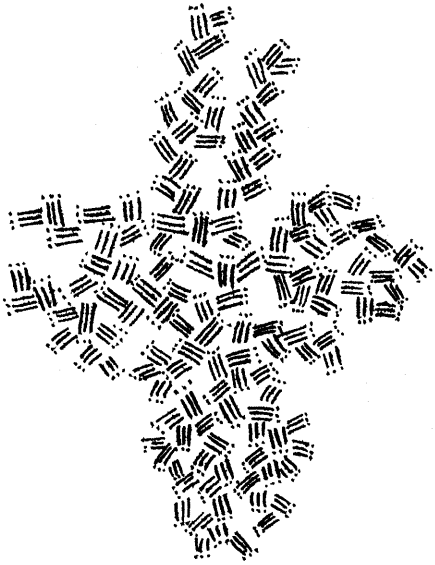
(10) 祭事に関する関心は地域によって異なるが、祭事に子どもが主人公として参加する度合は減っている。見物人として参加する度合は増えている。

(1) 駐車場は、ある時刻、子どもの遊び場として使われる。

(2) 遊園地は、子どもの遊び場としてよりも、高齢者の憩いの場になりつつある。

以上にとどめておきます。地域的な、個別の特徴は、まだまだ細かに描くこともできますが、要は、以上のような諸々の結論をもとに、いかに私たちの物の見方を組みかえるか、です。

一見、どこも似たような動きをしているように見えながら、実のところ、それぞれの地域におけるパターンは違っているのです。



地番空間

人びとにとっての生活立地条件は、都市における力と性格づけ、商業集積や店舗などによってさまざまな違いを示します。

一般的にいえば、人びとは、どこが住みよいかをきめるに当たっては、いくつかの手がかりによって決定します。人の集約としての都市、隣接する都市、都市の規模、機能の充実度、等々です。これが「都市空間」です。

これに対し、ひとつの都市のなかでもいくつかの別の条件が土地の選択を決めます。たとえば、住宅地か、商業地か、駅に近いか遠いか。つまり、生活立地、居住立地などです。これらは、「都市空間」に対し、いわば「地番空間」ともいうべき次元の条件です。ですから、それだけ身近です。町丁番地が一つの単位として重要性をもってくるような場所といってよいでしょう。

昔からよく言われたいい方に、「サンマを焼く匂いが伝わってくる」という表現がありました。あれなどは「地番空間」や「かいわい」をうまく表現しています。

生活模様

宅地開発の広告が示しているのは、夢のような快適な空間ですが、それらにも最少限以下の条件は載せられています。いや、それらこそ、人びとの関心事にほかならないのです。

子弟の教育、住民気質、交通の便、買物の便、医療の便等々です。

これらの条件のうち、全部が全部満たされているとしたら、それこそ夢のような現実ということになりますが、そのうちのいくつかは犠牲にされてはじめて選択がなされるということにならざるをえません。

つまり、限られた生活空間を確保するために、他のいくつかをガマンし、それをもって生涯の空間にせざるをえない。こうなりますと、悠々たる生活どころか、ちょっと気晴らしに生活模様を変えてみるとか、ひと工夫しないと情けなくなります。

住みにくい、住みにくいとグチをこぼしているだけでは何の突破口も出てきません。少し知恵をはたらかせ、住みにくいところを住みよくする新しい発想をしてみなくちゃ。

そのヒントは、子どものエリアに注目してみることから得られます。たとえば安全という価値がどれだけ確保されているかを、子どもの視点に立って眺めてみましょう。そうすれば、おとなとしてのあなたが気づかなかったことも見えてくる。これは偉大なシミュレーションです。交差点、道路、店舗、階段、見通し等々は、ふだん考えられているよりも、ずっと大切な問題をはらんでいることがわかってまいりましょう。

また、あの「接触」をここで再検討してみる必要もあります。消費的生活態度は、もっぱら「お客さん」ぶることを是認していますが、それを転じて、せめて再生産的なサイクルに切り換えてみたらどうでしょう。

バザーやガレージ・セールは、小さなできごとのようでありながら、地域を住みよい場所にするための推進力になることは確かですし、ミニコミなどの発揮する力は、地域へのまなざしを変えることにつながります。

ミニからの切り口

ミニコミなどは、これまでは、巨大な全国的なマスコミから見れば、たあいのない、無視してよいような存在と見なされてきました。

歯牙にかけるにも足りない小物と見なされてきました。ちょうど、界隈や地番空間が、「天下国家」の問題から見たら小さく見えたのと似ています。

でも、小物も大きな位置を占めるようになりました。ターミナル、端末、終点も、地域の成熟につれて、人びとの行動が多様になったり、高質になってくるにつれて、当然性格を変えはじめます。ミニの集積がマスを指導することも不可能ではなくなりました。

店舗をごらんください。専門店によるハイ・クォリティの店が立ちあらわれました。地域に密着したコンビニエンス・ストア型の小売店が活気を呈しています。のみ

ならず、こういう末端の店舗が、逆に消費者からの意向を集積し、いまや生産する側にフィードバックされているのです。

わかりやすくこれをたとえばなしに直してみましょうか。従来は、メーカーがすべてを指導し、小売店は小さな駅のようなものでした。だから、時刻表も、乗車券の発行も、車両の提供も全部メーカーまかせ。あとやるサービスといえば、愛想よくすることぐらい。これでは「サービス」の意味は表面的にならざるをえません。

しかし、事態は変わりはじめました。力のバランスは、循環型に変わり、小売店は、地域の人びとに日常の情報を提供するとともに、情報を収集するという役割をもつようになりました。これが「サービス」の意味になってきているのです。いうなれば、小売店が、みずから駅をつくり、切符を売り、時刻表をきめるようになったわけです。

同じことを「子ども」を通してやってごらんなさい。このおちびちゃんたちは、目に見えぬ情報を含めて、おそろしくたくさんの情報の発信源であることがわかってきます。

ニュー・コンセプト

それはまさに発想の転換の一大事というべきです。新しいコンセプトの出現です。さらに詳しく申しあげましょう。

「子どものエリア」は実践的に考えるには点と線と面の三つから見ていく必要があります。

「点」とは、子どもと家との関係です。家の中の行

動、家族の中の位置関係です。これらは、従来とも注目されてきたところです。長子か次子か、部屋数は、自家や借家か等々が。しかし、家の中でどのように行動するかという面に関心が移ると、「点」としてのデーターは参考程度にしか役立ちません。

「線」は、子どもの行動の流れです。つながりです。一見気まぐれに見える行動を、一つのつながりとしてとらえ、どのあたりにくびれがあるか、リズムはどうか、テンポはどうか、くりかえしはあるか、次の行動へ移るきっかけは何か、等々をつきとめてみることです。

「面」は、時間、空間、交通空間を含みます。毎日見られる行動の特性、週の初め、半ば、終わりに見られる特性の比較、土・日にきわ立つ特性、夜きわ立つ特性と昼にきわ立つ特性、というように整理していきます。

その結果、大のおとなのなかに「子ども性」が発見されたり、地域への「サービス」が、おとなと子どもの境界を少しずつ溶解させることなどもわかってきました。

もはや、「子どものエリア」というコンセプトを使ったからといって、「子ども」だけのことを考えているのだというウシロメタサや、押しつけがましいサービス精神などにつきまとわれなくともよいのです。「子どものエリア」というコンセプトをもつことによって、私たちは、自分たちのための「地番空間」のもつ意味や、「ミニ」のもつ集積効果などに気づいてきています。「子どものエリア」は、子どもだけのものではないのです。それは、私たちが自分を冷静に見つめ、私たちを生活史のなかで、生活成長過程における変化のなかでとらえなければ現実が見えにくくなったことから発しています。

こんなに面白いことってあるでしょうか。

「面白」とは、光が当たって、面がはっきり見えること、視界が広がって、身も心もときめくことを示しています。

スゴーク、オモシロイ、と現代のワカモノがワガモノ顔で言います。私なら、経験のどん底から発するような声で、「アッパレ、アナオモシロ」と踊り出すところです。

（名古屋大学）

子どもと(8)

十一月・ひなた

清水　光子

「お宅のお孫さん、幼稚園おきまりになった?」「ええ、〇〇学園よ」「よかったわね。あそこは有名小学校の入学準備をしてくれるって評判ですものね」「そうらしいの。だから息子夫婦大喜びしてるわ」「うちは上の男の子もそうだったので近所のA園なの。あそこも躾をきびしくしてくださるし、字なんかよく教えてくださるから、やんちゃな下の子に向いてると思うのよ。それに私、あそこの制服、とても可愛いので気に入ってるのよ。」お祖母ちゃん連のこんな会話をきいたのは十年程前の十一月であった。今、親達、若いお母さん達はもっと切実な幼稚園選びをしているのではないかしら、と想像している。いろいろな面で迷っている若い親達が都会地に限らず多いようである。

倉橋惣三先生は、『育ての心』の中で、「教育的な、余りに教育的なおっかさん」という題で書いておられる。「非教育的ではいけないというと、こんどはやたらむしょうに教育的になり過ぎたりする。…中略…親子とは天地自然の関係である。その自然の関係から親ごころというものがどの親にも自然にある。それを学者は母性といったり、愛育本能といったりする。ともかくも強い強い親ごころ

である。親が、子にとって必要なのも大事なのも、この自然の親ごころを子どもに対してもって呉れるものは、その親の他にないからである。そして、親がわが子を愛育してゆくことも、先ず以てそこから始まるのである。」とあって、多少の失敗はあっても親の親たるところがあり、親の真の態度もきまるのであるが、ところが「あまりに教育的に神経質になったり、理屈づめになったり、科学的になったりさせられると、折角の親ごころの自然よりも、教育的という意識や技巧が打ち勝ってしまって、親が教育的になったのか、教育的というものが親の位置に座っているのか分からなくなる。その顔まで母の自然の顔でなくなって教育面になったりする。」と、つづけて「今日の社会には殊にいわゆるインテリ社会には、そういう親のお母さんが多くある。もちろんその人に親ごころがないではない。もとはといえば我が子可愛い親ごころから一切が出発しているのではあるが、それが理論で圧され、学問でかためられ、形にはめられ、方法の末に走り、まるで機械仕掛けの母人形……。」これがもう数十年前の様相なのだ！　今はもっともっと激しく複雑な教育面のお母さんが多いのではないか！　子ども達はもっともっとあたり前のお母さんを欲しがっているのではないだろうか。〃そうすると、こうなるからやめなさい。〃〃それはきまりだから〃〃約束したでしょ？〃その上時間、時間で行動を区切られては子どもはたまったものではない。ルーズがよいのでは決してない。人間らしく〃そんなことしたらお母さんとても悲しい〃〃いいことしたのね。うれしいね〃と子どもと一しょに喜び悲しみ、楽しみ怒る。そんな親子関係を取り戻したいと切に思う。

幼稚園選びのことから外れてしまったので話を戻そう。子どもにとって嬉しい、楽しい園とはどんな園か、すてきな制服でもないだろうし、きちんと整った、色彩豊かな？　外壁でもあるまい。活気

に満ちた、温かい雰囲気。前のお茶の水附属幼稚園長外山滋比古先生はそれを〝園風〟と言われたが、そのような空気が子どもを育てるのだと思う。あしたもここへ来て遊びたい！　と子ども達が心底思うような園を親は選ぶのが当然であるし、保育者はそのような園風をつくるようにしたいものだと思う。

それにしてもどうして十一月に入園をきめるのだろうか。私はかねがね疑問に思いながらも意気地なく流されてきてしまったのだけれど、通園の始めは四月なので満四か月は宙ぶらりん。入園面接のときはまだ三歳何か月で、やっとおむつが取れるかどうかという三歳児は殊にこの四か月にめざましい成長がある筈。しかしそれは四月入園の段階でしっかり受け入れればよいとして、面接に行って○○幼稚園に行くことに決まったのに「いついくの。僕、早くいきたいな」ときいても、「おりこうにしないとだめなのよ」「お正月がきて、お雛様がすんでからよ」などと言われても子ども心は納得できるだろうか。折角の期待がしぼんでしまって、お預けをくったような裏切られたような思いはないだろうか。そして、四月が近づくと幼稚園に行くのだから、といっていろいろ制約が出てきたりするのでは？

また、サラリーマンの家庭では突然転勤が言い渡されるのも三月である。そんなこんなを子どもの側から考えると、この辺で原点に戻ってみてはどうかしら？　と無位無官の老婆は考えるのである。

東日本の十一月はうららかな、小春日和の日が多い。十月の空より一層あおく澄んだ空が都会でも仰げる日がある。日足は短くなっても午前中から二時頃までのやさしい日射しは、倉橋惣三先生の「ひなた」の文章そのものである。

〝ひなた。―そこは庭でも廊下でも、なんと、なごやかに人を魅きつけることか。
ひなた。―それは子どもでも大人でも、なんと、うっとりと人を睦ませることか。
ひなたには陰がない。冷たさがない。明るく、暖かく、人の心を解き又溶く。自分への不用意、人への親しみ。眠りもせず、醒め過ぎもせず。離れもせず。抱きしめもせず。ただ、おっとりと、われもなく他もない。
胸をあけて、肩を寄せて、足をなげ出して、手を組んで、のんびりと打ち集うひなた――

教育のひなた。ひなたの教育。〟

保育室のテラスのひなたで絵本を読んでもらっている子ども達
あやとりをしているA子とY子
「白くなったのは取ってもいいのね」とじゅず玉をつみ取っては小箱に入れているRくんとSちゃん
男の子が五人、さっきから殆ど黙々と山を作っている日の当たった砂場
そのどれもがしずかで明るい日なたの絵である。一瞬そこだけが時の流れからぬけ出したような、何かが凝縮してきらめくような、十一月の日なたである。

彼一語　我一語秋　深みかも　　高浜虚子

子ども同士にこんな姿をみたりする。

深まる秋の中で、生きものはエネルギーを一ぱい貯めこんで、じっくりと熟成を待っている。甲州のワイナリーを訪ねた日の感動と重なって脳裡に浮かぶ像はそれなのである。

明治神宮の表参道沿いに住んでいた半世紀前には、十一月三日になると並木の銀杏の殆どが黄金色になるのであった。都市の気温が高くなったらしいこの節でも代々木公園の銀杏の林は、十一月の園外保育の子ども達を黄金色のじゅうたんを敷いて迎えてくれる。それに紅葉の林はけんらん豪華な錦織で。いつか掃除をしている婦人が〝掃くのも惜しいようね〟とつぶやいていた。

喜べば　しきりに落つる　木の実かな　　富安風生

椎の実、なら、くぬぎの実を拾って余念のない林の道である。

明治神宮にこだわるようだけれど、何年か前、鳥がねぐらへ帰る様子を見たいと神宮の森に夕方保育をした。林の中に射し込む夕日の光の縞模様の美しさに感動しながら草地へ出てふりかえると、高い木々の巣へ鳥が鳴き交わしながら帰っていくのを子どもたちと見ていた。それだけのことだったけれど私は子ども達が何かを感じたものと今以て信じている。茜色に染まった空は見るまに紺青になっていって、宵の明星が輝きだす。茜色の雲を四歳児T君は〝熱そうな雲〟と表現したのも忘れられな

い。〝偉いなるものの前にいる小さきものの心を寸差を捨てた虔しさに感じさせられた（倉橋惣三先生「育ての心」より）〟一時であった。

「ゆったり、たっぷり、きっちりと」とこの一月に亡くなられた宇野重吉氏が演技のことで言われたことばを、十一月のひなたに思うのである。そして月末には

神無月　降りみ降らずみ　定めなき　時雨ぞ冬の　はじめなりける　　後撰集　よみ人知らず

子どもとともに暖かい楽しい冬を、と思う。

（音羽幼稚園）

子どもに発明・発見させる幼稚園

——アメリカ、イリノイ大学附属幼稚園 Child Development Laboratory での実践(3)—

結城（田村） 恵

イリノイ大学附属幼稚園、CDL（Child Development Laboratory）では、子どもに発明・発見をさせる教育を目指し、そのため、教具の選定、活動の構想、展開の方法等の決定は、ひとりひとりの子どもの活動を評価しながら行っている（三月号、七月号参照）。では、CDLでは、どのような方法で〝ひとりひとり〟の子どもを評価しているのか、実践例を挙げながらまとめたい。

CDLでの子どもの評価では、第一に、教師が活動センターを受け持ち、その活動センターに来た子どもの活動の特徴を観察すること、第二に、教師同士が子どもの活動の様子について積極的に話し合っていることが、特徴として挙げられる。子どもの活動を評価する内容は、「何をしたか」「なぜそういうことをしたか」「どう指導に生かすか」の三つの観点から検討することを強調している点が注目された。

活動センターでの観察

CDLの教室の構造は、様々な活動内容のセンターを、子どもが自由に行き来して遊ぶという、オープン形態になっている。この活動センターには、ごっこ遊び、ブロック、読書、美術、社会、科学、算数、運動のセンターがある（三月号、P20　図1参照）。各教師は、一～二の活動センターを受け持ち、そこに来る子どもの活動を、子どもとかかわりあいながら観察している。

写真1は、ブロックセンターでの活動である。この日のブロックセンターのテーマは、〃動物園〃だった。教師は、動物のポスターを周りに貼ったり、動物のおもちゃを置いて、雰囲気を作った。そこでの子どもの活動は、まさに十人十色であった。動物のポスターを見て、その名前を教師に尋ねた子どももいた。写真右端の子どもは、動物園の〃おり〃をブロックで作ったあと、その中に動物のおもちゃを入れていた。写真左端の子どもは、自分でハンドルの付いたブロックを取り出して、動

物園を案内するバスの運転手になった。一人で遊ぶ子どももいれば、他の子どもに指示を与えて、自分の遊びに引き込む子どももいる。教師は、このセッティングの中で、それぞれの子どもがどのような遊び方をしたかを観察し、子どもの特徴をとらえるのである。

この観察の方法の有効な点は、教師が活動センター全体を一度に見渡すことができる、それゆえに、子どもがいまどのレベルにあるか、どんな個性を持ち、どう伸ばしていけばよいかに対し、教師が十分に目配りできることである。筆者が、他に観察した幾つかの幼稚園では、子どもの数を教師の数で割って、その同数分の子どもを受け持ちの子どもとして、全体の活動の中でその子どもたちを観察するという方法が採られていた。つまり、自由に動き回る複数の子どもを、教室全体という視野で観察することになる。このような場合、受け持ちの子どもがどこにいるかを探すことに余分な力が使われてしまい、結果として、十分にひとりひとりの子どもを観察できなくなってしまう。

積極的な教師間の話し合い

子どもが降園した後の十五～二〇分間は、必ず教師全員が集まって、その日の活動について感想、意見などを交換していた。自分の活動センターで観察した子どもが、他の活動センターではどのような遊び方を展開していたのかを聞きながら、その子どもがバランス良く、諸領域の活動に参加しているかどうかをチェックしていた。また、指導方法の有効だった点、改善すべき点なども挙げて、今後の指導方法の検討をしていた。

また、各教師は、「週間報告書（weekly journals）」を毎週月曜日にヘッドティーチャー（主任教師）に提出することになっていた。自分の観察した子どもの活動の評価や、活動内容に関する感想や意見をまとめたものである。この報告書を通して、日々のミーティングでは十分にできない、長期的、総合的な子どもの活動評価を行っていた。

さらに、これらの活動の記録は、ヘッドティーチャーによってそれぞれの子どものファイルに分類・整理され

ていた。このファイルは、学期末に子どもの発達の様子を総合的にとらえるための資料とし、また父母との面接にも活用されていた。

実践例「週間報告書」から

以下に挙げる文は、室内運動場で「風船」遊びを観察した、教師による週間報告書の一部を訳したものである。室内運動場の中心には、子どもの肩くらいの高さの仕切りが置いてあった。隈のテーブルには、約五〇個の風船が置かれ、子どもたちは自由にテーブルにやってきて、風船を膨らませていた。

9／19一九八四（水曜日）

「風船」　――室内運動場――

Will：　風船を何度たたけるかに挑戦していた。何度か繰り返すうちに、力を加減してたたいている様子が観察された。弱くたたくと失敗も少なくなること、強くたたくと高く飛ぶが、捕まえにくくなることが解ったようだった。そこで私は、風船を抱えたままみんなの様子を伺っていたRachelに、Willとどちらがたくさんたたき続けることができるか、競争するように誘った。

Greg：　風船の膨らませかたを知らないAlexに、自分の風船を膨らませて教えていた。ところが風船の口を結ぶのに失敗したため、その風船が音を立てて手もとから飛んで行ってしまった。その風船の音とGregの興奮している様子に気付いたJoshuaもStevieも、Gregのまねをして、どちらが遠く飛ぶか競争し始めた。しばらく競争が続いた後、Gregは、風船の口に手を当てると冷たい〝風〟が出ていることに気がついた。

（中略）

この活動の中心的な目的な、様々な筋肉を使わせる運動をさせることであった。風船をたたく、蹴る、出来るだけ多くの風船を抱える等の動きにも、腕、手首、足、胴など全身を使う運動になっていた。さらに、Willや

Rachelは、力をコントロールすることによって、飛ばす高さを変化させる技能を体得していた。これは、風船が、子どもにとってつかむことが難しく、空中をフワフワとゆっくり動き、形が変わるという特性を持つためだといえるだろう。今後は、室外でもこのような活動をやってみたい。風の影響で風船の動きが変わることにより、子どもの身体活動が、より活発になると考えられる。

身体的活動以外にも、「風船」は様々な領域にわたる活動を刺激していた。風船の数を数える、風船をたたいてリズム遊びをする等の活動も観察された。また、Gregは風船の中の〝風〟（空気）に関心を持った。これらは、子どもの自然な遊びの中から生まれたものである。そこから、子どもが得た知識を考えると、子どもの自発性、あるいは遊びの持つハプニングを生かすことの大切さを実感した。

Gregの〝風〟の発見は、空気の存在を子どもに経験させるうえで重要な出来事であった。これを生かした遊びを考えてみたいと思う。よいアドバイスがあれば、宜しくお願いします。

何を評価するのか

この週間報告書から次のような特徴が読み取れる。まず、ひとりひとりの子どもが「なにをしたのか」を把握していることである。この時、結果として何ができたのかのみに注目するのではなく、そこまでの過程にも注目していた。例えば、「風船」の中心的な目的である身体運動をしたか否かのみに限定せず、他の領域の活動が展開されている様子にも注目していた。これはCDLが、ひとりひとりの子どもは異なる個人であり、考え方や行動や学習のペースも異なるという前提を置いているからだと考えられる。

さらに、観察した子どもの行動から、「なぜそういうことをしたのか」という子どもの思考を考察している。例えば、Willが何度も風船をたたいていたのは、「たた

くときの強さ」と「風船の飛ぶ勢い」との関係を体得しようとしていたことを考察している。また、Joshua や Stevie が、なぜ Greg の遊びに加わったのかについても推測してある。これは、子どもの行動の背景にある興味や関心が何なのかを見いだし、その遊びをどう発展させるかを考えるうえでも重要である。例えば、Will が何度も風船をたたいていたのは、「たたく音」を楽しんでいたと推測される場合には、その後に「どちらがたくさんたたき続けることができるか」という遊びにでなく、リズム遊びのようなものに誘導していただろう。

また、「どう指導に生かしていくか」という次の活動への方法を模索していることも注目できる。子どもの活動の結果が、教師の期待以下であった場合、教師の指導方法に問題があるとして、教材や活動の展開方法を再検討していた。子どもの活動の結果が、教師の期待以上のものであった時でも、その原因を考え、次の活動へ適用する方法を模索していた。

CDLの評価の方法・内容の意義と課題

小此木啓吾氏が『こころの進化』(注)のなかで、「なぜ、そういうことをしたのか」を考えるとき、まず人の話を聞くことが重要であることを指摘している。例えば、「おいしいアイスクリームが出されたのに、ひとりだけ食べない子どもがいた。それはなぜか。」という問いがある。これに対して精神分析の立場からは、次の五つの理由が考えられるという。

第一に、その子どもには、もうアイスクリームもたくさん食べてしまっていて、食べる気がしなかった(「欲求がない」)。第二に、甘いものを食べてはいけない、母親の許可なしに勝手にものを食べてはいけない、と注意されているから食べなかった(「超自我」の働き)。第三に、食べるとまずいことが起こるという、その時の状況から食べなかった(「自我」の働き)。第四に、「いい子は間食をしないで、ご飯をたくさん食べるべきだ」など、自分にあるべき原則を課して食べない(「自我理想」の働き)。第五に、「太りたくないから」「食べない

方がカッコいいから」など、自己イメージを保つために食べない（「理想自我」の働き）。

これらの理由のうち、どれが行動として現れているかは、本人に聞いてみない限り結論できない。しかし、本人を本当に理解するには、行動の理由を聞くことは必要不可欠のことである、というのである。

同様に、幼児教育と場面、即ち幼児の活動（遊び）の場面でも、子どもが「なぜ、そういうことをしたのか」を考えることは、子どもを理解するうえで必要不可欠なことである。しかし実際には、様々な活動が連続的に展開されているので、一々子どもに聞いていく訳にはいかない。しかも、ひとりひとりの子どもの活動について考えていくには、相当の労力と工夫が必要になるだろう。さらに、その連続的な活動をより意義のあるものに発展させていく刺激を、教師は与えていかねばならない。

CDLの実践は、これを実現させる一つの方法といえ

CDL式ケン玉遊び

3歳前後の子どもにとっては、赤い玉の穴の中に、一方の突き出た棒を入れることに興味がある。その遊びにもなかなかの技術がいるようだった。

るだろう。しかし、実際に自分たちの幼稚園や保育園に適応することが出来るかどうかは、幾つかの検討が必要になるだろう。

まず、教師には次のような資質が要求される。小此木氏が指摘していたように、ひとつの行動の背景にある判断基準を多角的に考え、そのうちどれが最も本人を理解する理由になっているのかを、観察から推論できなくてはならない。さらに、子どもの行動の評価から、より有効な指導方法を考え出す能力も期待される。

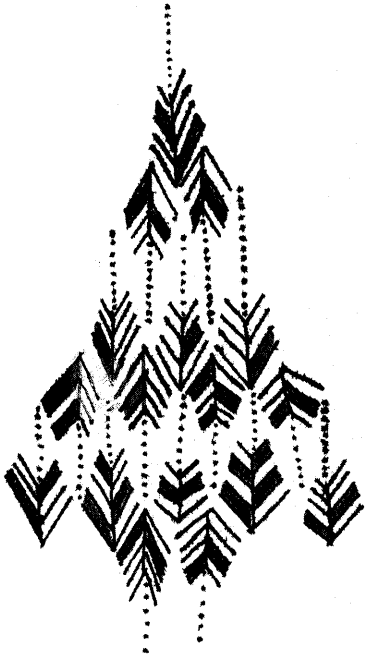
また、CDLでは、ひとりの教師が十分に観察できる子どもの数は約五人程度と考えて、教師の採用人数が決められていた。更に、子どもの活動の評価で「なぜそうしたのか」を考える際に、家庭での子どもの様子も把握する努力がなされていた。例えば、子どもが不機嫌で活動に参加しなかった場合に、活動内容そのものではなく、出がけに親に叱られたとか、前日の夜に十分睡眠を取らなかったということに、問題がある場合があることがある。あるいは、家庭での長期的な問題を含んだ場合

昼食　時には、ベランダへ机を出して昼食をとる。コップにジュースを入れるのに悪戦苦闘する子ども、食べ物の名前に関心のある子ども、いつも片付けをしたがる子ども。子どもの興味・関心、そしてそこから学ぶことはひとりひとり様々である。

もあるので、放課後の父兄との話し合いや、父兄の活動への参加等の方法で、家庭との連携が図られていた。

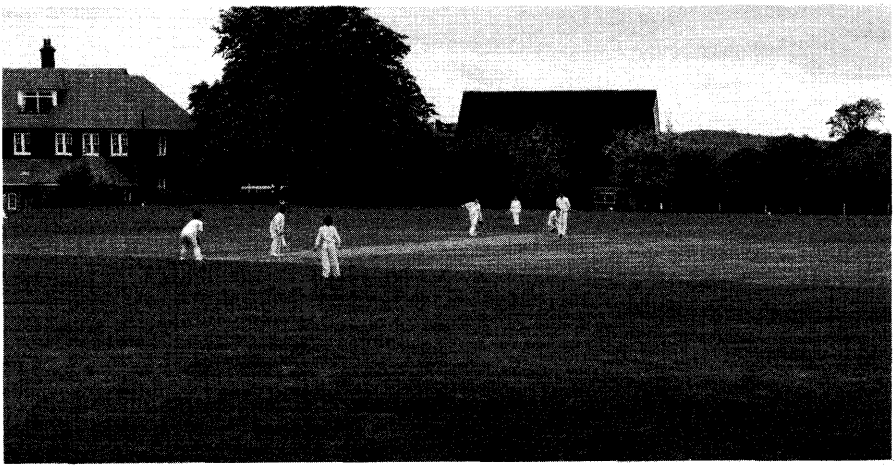
このような点を考慮したうえで、各幼稚園の状況にあった方法を工夫していかねばならない。

以上、三回にわたって、CDLの教育を、実践例を中心にまとめた。「教育の目的は、知識の量を増やすことではない。子どもに発明・発見をさせる可能性を創り出すことである」という方針に基づいたCDLでの実践は、日本の幼児教育の方法にも様々な示唆を与える。「読み・書き・算」をはじめとする知的教育をどう行えば良いのかということも、我々の抱える大きな課題である。この視点からも、子どもの興味・関心をひきおこし、活動の過程を豊かにする教具を与え、子ども同士の相互作用を重視しながら、子ども自身に発明・発見させていく、という方法から学ぶことは多いのではないか。日本での教育実践にそのまま適用することが困難な点も多いかと推測されるが、参考にしていただき、応用・改善して実践に生かしていただければ幸いである。



（注）小此木啓吾『ここの進化』CBS・ソニー出版一九八二 p.66—68

（UNIDA　インターナショナル　スクール）



イギリスだより

立教英国学院の子どもたち

小野　英子

イギリス南部の豊かな田園風景の中に立教英国学院はある。ロンドンからわずか一時間の距離ではあるが、その大都市の影はすっかり消え、緑の大地が広がる。広い牧草地には羊や牛が草を食み、或いは寝そべっている。学校の敷地内には野うさぎ（まさにピーター・ラビットの仲間のような）はもとより、鹿までもが時折顔を出す。このようなのどかな環境の中で三五〇名余りの子どもたちが勉学のみならず、寝食を共にしながら生活している。小学校五年生から高校三年生までのこの子どもたちの親のほとんどは海外で働く企

業駐在員、外交官であり、その任地はヨーロッパを始めアフリカ、中近東まで様々で、海外進出甚しい今の日本の経済、社会状況を映し出している。

この学校を、そして子どもたちを紹介するのにまず何から書き始めたらよいのか、大いに迷うところであるが、徐々に筆を進ませていただく。

○ 一日

朝七時、カランカランという、日直の先生の鳴らす鐘の音で生徒達は目を覚ます。十五分で着替え、洗面、それからよほどの雨降りでない限り全校生徒で庭に集合してラジオ体操をする。ここは地理的に緯度の高い場所にあるので夏は朝四時頃から夜は十時位まで明かるく、逆に冬は夕方四時すぎには真暗になる。従って冬のこのラジオ体操をする時間はまだまだ薄暗く、寒い。それでも毎日同じように続けられる。ラジオ体操の後、朝食となる。

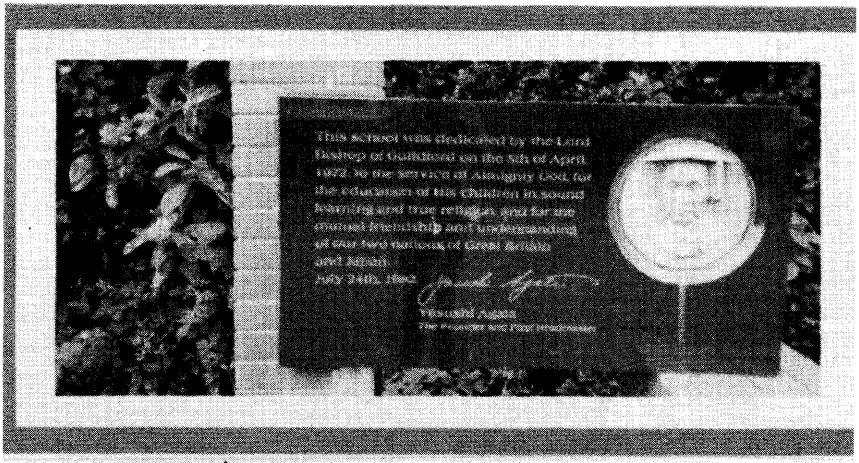
この学校を紹介するとき、その特色の一つとして「食事」が挙げられる。ニューホールと呼ばれる食堂に全員が一堂に会して三度の食事を摂るのであるが、それは先ず食前の祈りから始まる。一つのテーブルには二十人ずつ座るが席は指定され、そこにテーブルマスターの先生がつき料理を配る。いろいろな学年の生徒が入り混ざって並び、毎日一つずつ一定方向にずれていく。それによってより多くの生徒とふれ合うことができる。低学年、或いは新入生の隣りには、面倒見が良いと見込まれた上級生がくるように配慮されている。そしてその上級生達は、下級生にこの学校の食事の作法を日々の食事の中で教えていく。食事作法とは、第二代校長 Miss.Foss が「女王陛下の前へ出て食事をするという場合でも決して恥かしくないもの」として教えてくださったもので、十数年来続いている。確かに長くいる生徒ほど、ナイフと

フォークの使い方は巧みである。加えて、多人数が一斉になるべく速やかに食べられるようにと長い年月の中で編み出されたのであろう種々のこまごまとしたこと、これらが相まって三五〇名の食事が極めてスムーズに進むのである。まわりくどく書いてしまったが、これぞ百聞は一見に如かずといった感がある。

コーンフレークスから始まるイングリッシュ・ブレックファーストに準じた朝食の後は礼拝となる。立教英国学院は、聖公会系の学校である為、礼拝も大事な日課の一つとなっている。午前中の授業は、十五分のおやつの時間を挟んで三時間、午後も同様に三時間の授業がある。カリキュラムは日本の学校のものとほとんど変わらないが、英人による英語の授業も週数時間入る。特に高校生は、G.C.S.E. という英国の大学に入る際に必要な資格試験の為の授業を受けることができる。これらは物理、数学他、いろいろな科目に分かれており各々の試験をパスするときに、A、B、…のようにランク付けされる。高いランクでパスした科目が多いほどレベルの高い大学へ入れるというようなしくみになっているそうである。日本の大学で帰国子女を受け入れる際に、この資格が認められる場合もある。概して彼らの英語を学ぶ環境は恵まれている。

放課後は、六時の夕食までクラブ活動となる。夕食後はホームルーム、中・高生は一時間ないし二時間の授業、その後自習。小学生は、九時三〇分には寝る。各々の学年によって就寝時間は決められている。

なんと時間に縛られた生活なのであろうかと思われる方がいるかもしれない。しかし、限られた時間をいかに有効に使えるか、使えるような人間になるか、が、我々の期するところなのである。現に生徒の中には、毎日が同じで変化がなくつまらない、何もすることがない、と口にする者もいる。果たしてそうであろうか。自分が熱中できること、何か打ちこめることを見つけられないでいるこれらの子どもたち、彼ら自身が悪いわけではないが、無駄にしてしまっているものが多いのは確かである。勿論、私たちは彼らに解決の糸口を与えてやらねば



As the words of the founder, and the first headmaster, Mr. Yasushi Agata, will tell this school was Dedicated by the Lord Bishop of Guildford on the 5th of April, 1972 to the Service of Almighty God, for the education of his Children in sound learning and true religion, and for the mutual friendship and understanding of our two Nations of Great Britain and Japan.

ならないのではあるが。

教師は二十四時間体制の中、四六時中生徒と共に過ごすが、それによって生徒との関係も緊密になってくる。その為であろうが、我が校の生徒は教師に対する依存度が大きいようである。確かに親元を離れて暮らす彼らにとって、教師は頼れる存在ではあるが、一線を画するのも大事なこととなってくる。

○ 一週間

金、土、日曜日は普段とは違った過ごし方ができる。金曜の午後はフライデースポーツといって全校でいろいろな種目に分かれて運動する。乗馬はその中でも人気のある種目だが、近くの馬場まで行き、練習する。テニス、バスケットボール、サッカー、バレーボール等は校内で、バトミントン、ハンドボール、水泳等は近くの市の体育館やプールまで、バスで出かけていき、体を動かす。私は、ネットボールというイギリス独自のスポーツを生徒と共にやっているが、やっとルールを覚えたとこ

ろである。バスケットボールに似てはいるが、七人制で、ドリブルが使えず、パスだけでつないでいってシュートするといった具合の女子のみのスポーツでなかなかややこしい。クリケットもそうだが、イギリスには独自のスポーツがままあるので面白い。

土曜の午後は自由となって息抜き。そして夕食には、週に1度の日本食が出る。日本食といえども材料の関係でメニューにも限りがあるが、箸を使っての食事である。日曜日は八時起床、十時からは主日礼拝だが、後は自由、まさに自分たちの時間を持つことができる。一週間を通じて、生徒は語学及び楽器の個人レッスンを受けることができる。語学は英語、独語、仏語。楽器はピアノ、バイオリン、チェロ、ギター、木・金管と多岐にわたる。かなり多くの生徒が何らかのレッスンをとっており、特に音楽関係は、昨年クィーンエリザベスホールという大きな会場を借りてコンサートを開いたりと盛んである。

○ 地域とのつながり

立教英国学院は、Rudgwick村の一画にある。生徒達の衣類の洗濯、ベッドメイク等をしてくれるクリーニングレディース、キッチンの手伝いをしてくれる人々は、皆、Rudgwick村に住んでいる。彼らに負うところは非常に大きく、生徒には彼らへの感謝の念を失しないよう心がけさせている。そしてこちらからの働きかけとして、月に一回クラス毎にこの村の教会の日曜礼拝に行ったり、老人クラブ主催のバザーがあれば参加する。Rudgwick村だけでなく更に広い地域とも交わりを持つ。近隣の学校との対外試合、フェイト（バザーのようなもの。fête）への参加、ガールガイズ（ガールスカウトのこと）への参加などが挙げられるが特にフェイトでは、剣道、茶道、書道等を披露して日本文化を紹介する。このような交わりを持つことは学校としての立場の上でも大切なことであるが、それと同時にこれらに参加した子どもたち自身が貴重な体験を得られるという点も見逃せない。子どもたちの自覚の有無はさておい

ても。

○ 小学生たち

小学校五年とはいえ、まだ十、十一歳である。親元を離れ、さぞ寂しきやと思えばそうでもなく、わいわいと元気よくやっている。もっとも、時折妙に甘えてくる子どもがいるときには、やはり…と思うのだが。イギリスでは子どもを寄宿学校に入れることが多いようだが、日本ではあまり考えられない。現在、五年生五人（男子四、女子一）六年生九人（男子八、女子一）合わせて十四人、女の子が極端に少ないが、彼女達はそれなりに頑張ってやっている。彼らの両親のほとんどはイギリス在住である。この学校へ来る前は現地の学校へ一、二年通ってきた者もおり、英語の話せる子どもが多い。但し、読み書きはどうかというと、それほどでもない。が、私は彼らの前では極力、英語を使わないようにしている。

使うや否や、彼らの厳しい評価が下されるからである。十四名の小学生の内、一人は日本の小学校へ通ったことがない。アメリカ、それからイギリスと、ずっと現地の学校、週一回、日本語補習校へ通っていた。あとは多分日本の通信教育を受けたのであろう。今の段階では、学習面、生活面共に、日本の学校へ行っていないのが壁になっているというようなことはない。子どもが現地校に通っている場合、家庭における学習がポイントとなってくる。去年の小学六年生に父親がイギリス人である子どもがいたが、彼は日本語、英語共、話すことはもちろん、読み書きもきちんとできた。立教に来るまでは、ずっと現地の学校である。口で言うのはたやすいが、これだけきちんとできるようにするには、かなりの困難がつきまとう。母親の努力が推し量られるところである。

語彙が豊富に取り入れられるはずである時期に、英語の環境の中で学んだ子どもたちは、日本語の語彙力という点で多少不利となる。

英語では、こういうのだが、それを説明する日本語が見つからない、というようなこともある。概念はわかる

のだが、それを英語で吸収しているのである。彼らはこれから少しずつ、言葉を得ていくしかない。

学校における生活を最も楽しんでいるのは小学生であろう。文句の多くなる中、高生とは違って、自分たちで、楽しむ術を知っている。自分たちで何かしら遊びを見つける。事実、豊かな自然の中には、四季を通じて、種々のものが潜んでいる。彼らは、上級生とも友達である。体が倍以上あっても、先輩とは呼ばずに○○君なのである。また、上級生もこのなまいきな（？）小学生と遊んであげるのである。

小学生のみならず、この学校の生徒からは日本の学校の子どもたちと違うという印象は与えられない。私が、この学校へ来る前は、海外で学ぶ子どもたちだから、何か違うのではないかと予想していたのだが、それははずれた。なぜ、こうも、と思うくらい、いわゆる日本的であると、私の目には映ったのである。

一年を通じていろいろな行事があるが、今年度は（立教英国学院は、四月から三月までの三学期制）五月に球技大会、学校校内ではあるが、ブルーベルという花が咲き乱れる頃、絨毯のように咲きつめているのを、全校で見に行くブルーベル見学、それから、つい先日、全校でウィンブルドンまでテニスの試合を見に行った。二時間、延々と並んで待った挙句、やっとナブラチロワやマッケンローの試合を直に見る機会を得た。小学生は、テニスの試合はどこへ行ったのやら、アイスクリームを食べることに専念していた。

（立教英国学院）

昆虫の世界

夏から秋へ　2

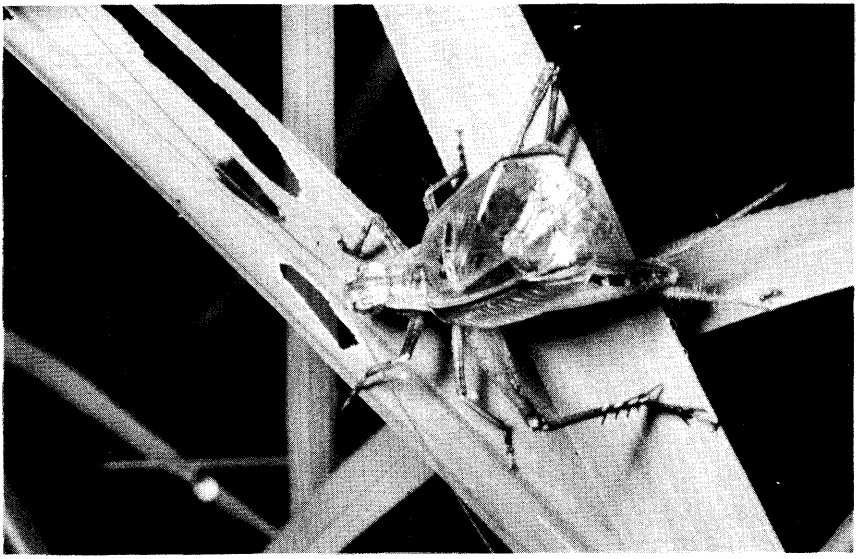
小島　賢司

夏を謳歌した虫たちの姿が少なくなり、夜になると涼しさを感じる頃になると、鳴く虫たちの声があちこちから聞こえてくるようになる。これら秋の鳴く虫たちは、昔から日本人に親しまれていたようで、平安時代の歌にも詠まれている。

昨年の秋、昆虫館で「秋の鳴く虫展」を催し、期間中一日二回三十分程の内容で、「秋の鳴く虫のお話」を来館者を対象に行った。話を始める前に、知っている秋の鳴く虫の名前を聞いてみたが、子供たちの知っている虫は、スズムシ、コオロギ、マツムシ、ウマオイ、クツワムシがほとんどで、これ以上名前が出る時は、特に昆虫に興味のある子がいる場合か、展示してある写真や実物を見て答える場合が多かったようだ。これら五種類の鳴く虫は、童謡「虫の音」に出てくる名前で、歌と共に親しまれている様子がうかがえた。しかし、虫の名前は知っていても、実際にテープの鳴き声を聞き分けられる子供は少なかった。飼育されているスズムシは別とし

て、これらの虫の声が聞ける場所は年々少なくなっている。ある日、初老の女性が「カンタン」の鳴き声はどんなですか」と質問してきた。手持ちのテープを聞かせたが、「こんなものか」と言う顔をしていた。鳴く虫の中で一番美しい声とされているので、期待していたのだろうが、見事に裏切られてしまったようだ。そこでカンタンの声を聞くには背景が必要で、静かな山の上で聞くのが一番だと、一言付け加えておいた。私もいろいろな場所でカンタンの声を聞いたが、奥多摩で、静まりかえった湖面を眺めながら聞いたカンタンの声は、今も私の耳に残っている。

鳴く虫の仲間を分類するとコオロギ科とキリギリス科に分けることが出来る。コオロギ科は日本に約六十種、キリギリス科は五十種程が知られているが、すべてが秋に鳴くわけではない。コオロギ科の特徴として、体は平たくマッチ箱を横にしたような体をしている。鳴く時は二枚の羽を立てて鳴き、羽



▲羽を立てて鳴くマツムシ

は通常、右前羽が左前羽の上に重なっている。体色は例外はあるが黒っぽいものが多いようだ。これに対しキリギリス科と虫は、体が縦に長くマッチ箱を立てたような体をしている。鳴く時は、羽を立てずに鳴き、コオロギ科とは、羽の重なり方も逆になっている。体色は同じ種類でも緑色と褐色のものとがある。

虫たちはなぜ鳴くのだろうか。その意味を考えてみよう。エンマコオロギの鳴き声を調べてみると、三通りの鳴き方があることが分かる。

第一は本鳴きといい、オスが自分の縄張りを主張する時や、メスを呼ぶ時の鳴き声で、「コロコロリー」と鳴き続ける。

第二は誘い鳴きといい、メスがすぐ近くまで来た時の鳴き方で「コロコロコロリーリーリー」と本鳴きよりやさしく聞こえ、まるで彼女に愛をささやいているように感じられる。

第三は争い鳴きといい、オス同士とケンカの時の鳴き方で、顔をつき合わせて、「キリキリキリ」とお互いに鳴き合う様子は、人間のケンカにもよく似ている。

この三通りの鳴き方を観察するには、飼育容器に第一の場合はオス一匹、第二はオス一匹メス一匹、第三はオス二〜三匹を入れて観察すれば良い。こうして自分の耳で、鳴く虫のことば（？）がわかるようになると鳴く虫の世界がおもしろくなってくる。

鳴くことは、彼らにとって必要不可欠なことであるが、その行為は常に危険と隣り合わせでもある。ある日、クツワムシの声を聞いていた時、近くで鳴いていたものが急に鳴きやんだ。懐中電灯で照らしてみると、オオカマキリに捕えられ食べられるところであった。鳴き声は外敵にも自分の居場所を知らせることになり、命がけの行為である。もっとも虫にとって一番危険なのは人間かも知れないが……。

鳴く虫は、夜行性のものが多く、暗闇の生活では、目よりも音や臭いの方が重要な意味を持ってい

る。その為、姿、形は非常によく似ているのに、別種の場合がよくある。決め手になるのは鳴き声で、童謡に出てくるウマオイにも二種類あり、「スーイッチョン、スーイッチョン」と鳴くハヤシノウマオイと「シッチョ、シッチョ」と短かくせわしないハタケノウマオイとがある。両種はうまく住み分けており、鳴く虫の夜間採集を行った時、雑木林の中でクツワムシといっしょに鳴いていたハヤシノウマオイの声を聞き、次のポイントの車で移動中に畑の中からハタケノウマオイの声が聞こえたので、あわてて車を止め採集したことがある。実にぴったりな名前を付けたものだと感心してしまった。（もっとも、ハタケノウマオイは草むらが主な生息場所ではあるが。）この両種を見比べてみたが、さっぱり区別が出来ず、図鑑の解説を見ながら、虫メガネでやっとその違いをみつけることが出来た。メスにとっては、鳴き声で相手をみつけるので自分の伴侶を間違えることはないのであろう。

オカメコオロギでは、三種類が共によく似ているのでさらに難しくなる。鳴き声で仲間同士のコミュニケーションをはかり、秋の夜長を鳴き通した鳴く虫たちも、冬の気配が感じられる頃には卵を残して、皆死んでしまう。次の世代の卵は厳しい冬を耐え、秋にはまた、私たちにその鳴き声を聞かせてくれる。

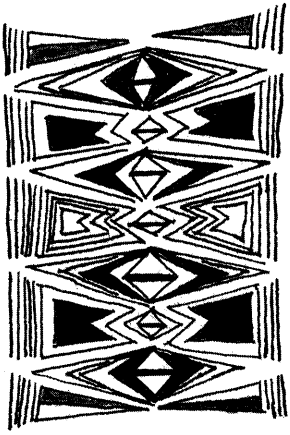
今、昆虫たちの暮らせる林や草原は、どんどん少なくなっていく。人間の暮らしが豊かになることは良いが、子供たちの知る昆虫の世界が、図鑑の中だけのものにならないように。いつまでもカブトムシが雑木林の王様でいられ、歌に出てくる鳴く虫の声が聞かれる世の中であってくれることを願って、この稿の終わりとしたい。

（豊島園昆虫館）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆子育てを考える　その5

年長(年少)のうそ
——家庭内の人間関係の縮図——

飽田　典子



事例1　超自我が育たなかった一郎君

学校へ行きたがらない、お金にルーズ、うそをつく、あきっぽい。これは今年三つ目の高校に一年生として在籍している一郎君が、学校から教育相談を勧められてやってきた時の相談したい内容でした。

お母さんとしては学校に行きたがらないことを除けば、他人様に相談するほどのことではないように思ったのですが、担任の先生があまり熱心に勧めるので、一度行っておかねばとの義務感から相談を申込んだようでし

た。

○お金が元のトラブルで友だちを失なう

三つ目の高校というのは、彼は毎年受験をして高校に入学するのですが、親しい友だちが出来ると、その友だちとお金が元のトラブルを起こして学校に行きにくくなり、途中で辞めてしまうということをくり返してきました。

今回も夏休みにコンピューターの会社でアルバイトをしたことをよいことに、何人かの友だちにパソコンが安く手に入るともちかけて大金を集め、それを使ってしまうという詐欺まがいの事件を起こしたことが発端でした。

この前にいた学校では、お母さんが定期代と言って渡したお金をあっと言う間にゲームセンターで使い果たしてしまい、その穴埋めに友だちから毎日の交通費を次々と借りながら、返すことをしなかったようです。それで、彼にお金を貸したら返らないと評判になって学校に行きにくくなりやめたということです。その上一学期の途中で実際には行かなくなってしまった彼ですが、毎朝定刻に大きな袋を持って家を出るので、お母さんは彼の欠席を一学期末に学校から言われるまで知りませんでした。

○〝借りたお金は返す〟ことを知らない。

このように彼のうそを数えあげたらきりがありませんが、今までの様子を聞いて担任の先生が問題視したのは、人から預かったお金を使ってしまいながらその後も平気でその友だちのところへ行く罪の意識のなさでした。が、相談の担当者としては、それに加えて持ち物の自他の区別のなさも深刻に思われました。一度自分の手に渡ったならばそれがどういう意味をもつお金であるかということは消え失せて、〝自分のもの〟になってしまうトリックは、ふつうこの年齢になるととっくに卒業して使えないはずなのですが、彼はいまだに打出の小槌をもつ魔術師ででもあるかのように、お金のルールがわか

っていないようでした。

彼と話してみますと、知識としてはうそをつくことはいけないことだということはわかっているのですが、自分でもよくわからないうちにうそになっているとのことです。明らかに相手をだます目的の意図的なうそも問題ですが、彼の場合はこの自覚のなさが問題といえるのではないでしょうか。

○事なかれ主義のお母さん

こうした彼の問題行動も実はお母さんだけが知っていることで、お父さんには内緒のことでした。そして今回の相談のきっかけも、担任の先生が事の重大さを感じたが故に得られたようなもので、お母さん自身は他人様に相談するような事ではないという認識でした。ですから彼は今年この担任の先生と出会わなかったら、このままお金にルーズでうその多い人間として成人するおそれが大きかったように思われます。

このお母さんの事なかれ主義は夫婦仲の悪かった自分の両親を見て育つうちに、長女で四人きょうだいの総領という立場から自然に身についたもののようでした。たとえば、毎年夏休みになると両親の郷里に遊びに行くのですが、母親の実家でお土産を出す時、いつも母親が耳元で「お父さんには内緒だよ」とささやくのです。それがずっと子供心にどうしてか疑問だったのですが、小学校四年生の時初めてその意味が理解出来たということです。すなわち、父親の実家よりも、自分の実家に多くのおみやげを持参することを口止めする意味が込められていたのでした。それ以来このお母さんは自分の周囲で不思議な事、不可解な事が起こっても、真相をつきとめようとしたら困る人がいるのではないかという気がして何も聞けなくなってしまったといいます。

○子育ての上では、超自我の形成に失敗

一方、彼のうそはいつ頃から始まったかをたどっていきますと、お母さんの記憶は定かではありませんでしたが、確か小学校の低学年からではないかとのことです。

というのはその頃、学校の先生から彼は学級の子どもたちから〝きらいな子〟として名前があがっていると言われたことがあり、それは今だに忘れられない先生の一言としてお母さんの記憶にあったからです。その時の先生の説明では忘れ物をして彼が友だちから借りている立場なのに、持ち主が使おうとするといやな顔をしたり、なかなか返さないので、嫌われるようになったのではないかとのことでした。

この時自分が彼にどのように対応したか、このお母さんはいくら思い出そうとしても思い出せないというのです。

今から思うとこの時既に今日の彼の問題性が提起されていたように思われますが、問題であるということを認識する回路が故障している場合は発見が遅れ、その結果彼に自他の区別あるいは、物事の善悪を判断する超自我が育たなかったのではないかと思われました。

事例2　親の生き方の鏡としてのうそ

――本心を偽っての生活に終止符を――

中学二年の花子さんは、中学生になった頃から家出をするようになり、最近は特に頻繁です。ある時は新聞配達の学生の所にいたり、暴走族のお兄さんのところにいたり、大体は一人暮らしの若い男性のアパートで発見されることが多いのですが、両親で迎えに行くと相手の男性がびっくりするのです。

というのは彼女はそこに置いてもらうのに「両親が離婚してお母さんと暮らしているんだけれども、お父さんが欲しい」とか、「お父さんが無理ならお兄さんでいい」、あるいは「お父さんが大酒飲みで朝からお酒を飲んで働かず、自分に乱暴をするので家に帰りたくない」など、その時々で思いつくうそを並べ立てて相手の同情をかっているようなのです。かわいい顔の女の子が自分の不幸を綿々と訴えると、たいがいの若い男性は黙って二〜三日は泊めてくれるということです。さすがに四日、五日となると「ここにいること位連絡しておいた方が

いいんじゃないか」と言うようですが、中には「家から金を取って来い」とそそのかす者もいて、両親はこの一年半、彼女に振りまわされどおしでした。

○時と場所によって違う面を見せる彼女

こんな彼女ですから、どんなに反抗的な女の子が現われるかと内心恐れを抱いて相談の最初の日を待ちました。ところが両親に伴われて来た彼女は、従順な良家のお嬢さんといった雰囲気で、反抗的なそぶりは微塵も感じられません。申し込みの電話で得られた情報から勝手に彼女のイメージを作り上げていた自分を愚かに思う一方、この違いは何を物語っているのだろうかと、職業的な関心を呼び起こされたことも事実です。

○なかなか本心を明かさない

花子さんとはもう一年以上のおつきあいになるのですが、時々行方不明になることもあって、他の人のように定期的な面接になりにくいのが現実です。そのためかなかなか本当のことを話しあえる関係になれないことが、相談の担当者として、今の一番の悩みといえます。一見素直そうで、家出の話題に触れてもいやな顔をするでもなく、どこで何をしていたか、実にスラスラと語るのです。あまりの流暢さにかえって不自然さを感ずるのですが、初対面の人は好感をもたされてしまうようでした。ところがこうして長くつきあってみますと、どこまでが本当のことなのか、彼女にとっては聞かれた時に答えるための用意された筋書きにすぎないのではないか、といった疑いの目をもたせられることもしばしばです。こちらまでが疑いの目で彼女を見るようになっては、相談を引き受けている者として失格だと思うのですが、今だに家出をしたくなる気持、自分の家に対する気持、家出中に遭遇したいろいろな出来事などについて、彼女の心に触れるような話が出来ないのが残念に思われます。

○自分を殺して婚家に仕える母

花子さんの家庭はお父さん方の祖父母と両親と彼女の

五人家族ですが、同じ敷地内にお父さんの姉と弟の家族がそれぞれ家を建てて住んでいます。お母さんが嫁いできた頃は弟さんはまだ独身で一緒に暮らしており、お母さんは夫方の一人一人に気を使い、誰からも非難されないようにと神経をすり減らす毎日でした。その上おばあさんは人一倍きれい好きで、彼女が生まれると、おっぱいを吐いて家の中がミルク臭いのを嫌がり、汚れたおむつの置き方まで注意した程です。彼女が少し大きくなると食事の時物をこぼしたり、外で遊んで家の中へ砂を持ち込むのを嫌うので、外遊びをさせず、食事はかなり大きくなるまでお母さんが彼女の口に入れていました。

○外の世界に触れて、自分を失う

彼女が幼稚園へ行く年齢になり、お母さんは果たして彼女が友だちの中に入っていけるかとても心配でした。けれども入園テストの時も入園式も大して混乱した様子がなく救われたとのことでした。むしろ幼稚園へ行くとはしゃぎまわり、目立ちたがるのでびっくりしたということです。ところがある日迎えに行くと、先生がいつになくにこにこと笑いながら彼女の手を引いてきて、「昨日お父さんとお母さんが大喧嘩をしたんですって？」と言うのです。一瞬何を言われたのかわからないでいると、彼女はその日、登園するなり先生たち一人一人に「ねえ先生」と訪ねていき、最後は事務のおばさんにまで同じことを言ってまわったというのです。

結婚以来、波風を立てないようにということでやってきたお母さんなので、夫とけんかなど考えられないことです。ですから彼女が幼稚園でなぜこのようなとんでもないうそを言ってまわったのかわからず、お母さんには途方にくれるばかりでした。お父さんに話しても首をかしげるだけで、その時は大事件だった割に、意味がつかめないまま何となくうやむやに終わってしまったようでした。

○幼稚園での芽が中学で大木に

小学校時代は大過なく過ぎ、この事件もすっかり忘れ

かけていたところに家出事件が起り、お母さんはとっさにこの幼稚園での出来事を思い出したということです。

彼女の家出は最初のうちこそ移動教室とか林間学校といって穏していられたのですが、度重なるうちにいつしか祖父母に、そして両隣りに知られるところとなり、両親、特にお母さんは、公然とおばさん、おじさんから非難を浴びることになりました。

しかしこうなってみて思うことは、あの子は小さい時から、私のこの家での存在（自分の気持を曲げてでも、夫の一族と波風を立てまいとしている）をわかっていて、自分のかわりに大それたうそを言ってまわっているのではないかということが頭を離れないとお母さんはいうのです。そしてこういう結果になるのだったら、自分を取り繕ったり、相手にあわせたりしないで、最初からありのままの自分でやってくればよかったと反省するのでした。また幼稚園の時にもっと真剣に取り組んでいたならば、今になって彼女に家出をさせなくてすんだのではないかと、悔んでも悔みきれない思いのようです。

うそにも意味が

今回は私たちに割と身近なうそについて取りあげました。自分も含めて人は皆窮地に追い込まれると、意識してか無意識かは別としてうその魅力にとらわれがちです、紙面の都合上、うそが習い性となっている二例しかとりあげられませんでしたが、この他に事実を誇張したり、針が棒大に尾ひれをつけるうそ、相手の関心を自分に引きつけようとしてつくうそ、相手が期待すること喜びそうなことを考えてついてしまううそなど、うそにも様々なものがあるように思われます。しかしどのうそもそれが行使される時、花子さんのお母さんが見事に分析したように、その人にとって何か意味あるものとして機能していることに目を向けることが大切に思われます。

基本的な社会生活上のルールを教える

しかし事例1の一郎君の場合は、うその意味を考えることに加えて、豊かな時代に育った世代の、一つの社会

病理現象としての要素が加わっていることも否定できないように思われます。冗談まじりに、今の子どもたちにとって〝あなたの物は私の物〟という感覚は、当り前なのだろうがという人もおりますが、駅前に置いてある自転車を黙って失敬して、どこにでも放置するあの神経は、〝借りた物は返す〟というルールをきちんと教えて来なかった私たち大人に責任があるのではないかと胸が痛む思いがします。また仮りに注意したところで「ちょっと借りただけ」との答が返ってくるのも今や常識ですが、単なる言い逃れに終わらせるのではなく、基本的な社会生活上のルールを、小さい時から体を通して教えていくことが必要なのではないでしょうか。

幼児だからと見過ごすと大事に

稿を終わるに当って、最近よく問題行動の早期発見とか、子どものサインを見落とすなということを言われます。今回取りあげた二例はいずれも幼児期に、思春期になって本格化した問題行動の芽がみられました。しかしうそというのは割と身近な問題行動で、〝うそも方便〟ということわざがあるほどですから、社会的に容認されている部分があることも確かです。また子どもであるというだけで、問題行動の芽として出てきたうそも、問題視されることなく見過ごされてしまう可能性が大きいこともこの二例は物語っているように思われます。これを機に、私たちの周囲にうずまいている様々なうそに目を向けて、その意味を考えてみるのも面白いのではないでしょうか。

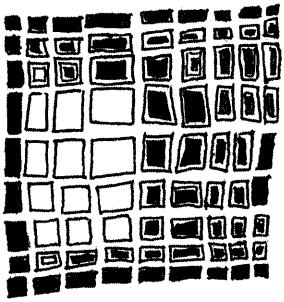
一郎君と花子さんの二人からは、習い性となっているうその背景に、その家の人間関係の縮図を見る思いがして、うそをつく子どもに視点をあてて、問題行動の改善を考えがちな自分の姿勢を、改めて検討しなおしてみる必要を感じさせられています。

（東京都立教育研究所）

――若いお母さんたちへ――

最新　東京子育て事情――私の場合――

はるにれの会
鈴木　貴志子



わが家は夫婦と子供一人（碧（みどり）・5歳）の核家族であり、二年前に中央区月島に引っ越してきた。月島は、流行のことばでいえばウォーターフロント。隅田川ぞいの倉庫跡地利用の高層マンションに住んでいる（ナウいでしょ？）でも向かいは大正時代に建てられた長屋が軒をつらね、せんべい屋やもんじゃ焼き屋なら捨てるほどあるけれど、気のきいたパン屋がないのが悩みの種で、フランスパンを買いに銀座三越まで走ることになる。訪ねてきた人はレトロでよいと大喜びしてくれるが……。共

働き、保育園、一人っ子、そしてお入学（有名付属小学校が通学範囲内にあるため、ああ恥ずかしい……）と都会での子育ての問題を全部かかえこんでいる。

自己紹介を兼ねて申し上げると、私は「ウチは2キャリア・カップルならぬ1.5キャリアである」と主張している。私にとって仕事をするのは改めて考えるまでもなく当たり前のことだけれど、夫も妻も一人前の仕事をしていたら、子育てのところにシワ寄せがくるのは目に見えている。子育ての大部分を人手にゆだねた上で、さらに家事と仕事をこなすスーパーウーマンでなくてはならぬ。それをかろやかにこなしている友人も、フーフーいいながらのりこえている友人もいないわけではないけれど、私には荷が重い。私はボーッとした怠け者だし、夫とも濃密につきあいたいし（何しろ夫は女子大でも教えている。私があまり放っておくと、倫理感に欠けた女子大生がお世話をやきたがるのじゃないかと心配で、心配で……）、それに何よりも子供とつきあうのはおもしろい（仕事よりおもしろい……こともある。ただしフルタイムでとなるとおもしろくない）。というわけで夫と妻、ふたり合わせて1.5キャリアくらいにしておけば、余裕のある方が子育てに時間を使うことができる。今のところは夫が1.2で（大学教師プラス物書き）、私が0.3（母親プラス二流コピーライター）。夫はいつの日か教師をやめて、子育てと物書きだけをやりたいと言っているから、私が華々しくキャリアウーマンとして復帰する日がこないとも限らない（そうなったら夫が0.5で、私が1.0になる、ふ、ふ、ふ）。この希望があるため夫は「ウチは1.5キャリア」説に反対はしていないが、これは夫の説ではない。彼は単に「ウチの中がホコリだらけで、タンスの中に真夏はセーター、真冬は麻のシャツがあるという事態を何とかしてほしい」と言っているだけだ。「何とかできたらいいな」と思ってはいて、いつの日か家中が夢のようにかたづくことを夢みている。

さて結婚当初からのわが家のキャリア事情と子育て事情を表にしてみよう。

年代	子ども	妻	夫
1982（結婚する）	（新居を妻の実家に近い市川に決め	・化粧品会社のP・R誌編集（『花椿』…愛していた）。ただし、結婚と共に、それまでの深夜残業あたり前という働き方をやめ、六時には終業と決める。他編集部員はそうではないので、だんだんはみ出していく。子どもの文化と関わる仕事をしようと、編集部をやめる決心をした後、妊娠となる。 ・会社を辞めフリーのエディターとなる。まわりには出産退職とみなされるが、臨月まで働く。	・翻訳家。大学院課程在学中。彼が訳している知的な本はあまり収入にはならない。お金を稼ぐ必要にかられると、S・Fや、ロマンス物を訳す。☆宣伝鈴木晶訳『プラス・ラブ』――母性について考察された本で、おもしろくてためになります。しばらく絶版になっていましたがこの秋、筑摩叢書として再発行されますから、買って読んでね。☆
1983	・七月十三日、パリ祭の前日に女の子が生まれる。	・子どもが一歳になるまで、子育てにほぼ専念。子育ての息抜きに夫の翻訳を手伝う。	・『子どもは小さな哲学者』（思索社）『小さな反逆者』（福音館）と子どもに関した本の翻訳を出版（☆いい本です。買ってね☆）。収入は予備校教師。

1984

・ちょうど満一歳になった頃、公園に子どもを連れてくる保育ママさんと知りあいになる。彼女の人柄を見込んで、子どもを預けることにする。最初の数か月は午前中のみ。次に昼ご飯まで、次に四時頃までと、ゆっくりと保育時間を増やしてもらった。

・ほぼ二歳になったところでフルタイムで保育ママさんに預ける。

・母親が忙しくなったことに歩調をあわせて（？）保育ママ嫌いとなる。預けようとすると、ジンマシンが出る程大泣きして嫌がる。無理をして預けもしたが、ついにあきらめて、母方の祖母と、ベビーシッターの交代で、家庭内で保育をする。四月に保育園に入園す

1985

・フリーのエディターとして、スローペースで仕事を再開する。我が家に赤ちゃんがいたから『わたしの赤ちゃん』（主婦の友社）に、記事を書く。仕事はおもしろかった。こういう仕事はかつて築いたコネクションから来る。持つべきものは友。

・広告代理店に勤める友人から声がかかり、前とは別の化粧品会社を担当するエディター&コピーライターとして就職する。週に三日出社、十時から五時までと考えられない程恵まれた条件。以前のキャリアが一〇〇パーセント役に立った。

・一年もたつとこの仕事はひどく忙しくなり、フルタイムに近い働きぶりの期間もあった。

1986

・大学の非常勤講師となる。大学、予備校、翻訳、執筆と多忙になる。

るまでの数か月間、大変苦労した。

・四月に保育園入園。一か月位で慣れて、何とか通うようになる。

（八月に月島に引っ越す。これまでのアパートが手狭になったため、通勤に便利でしかも広いところを探す。となると東京の城南、城西地域はあきらめることになる。今のマンションのあるところは、もと倉庫街というのも下町というのもおもしろいと思った。狂乱物価の直前に、親の助けも得て、購入に踏み切る。）

・新しい保育園には順調に慣れる。

・保育園には慣れたが、決して喜んで通うことはない。「行きたくない。」というのをだましだまし通った。

・幼稚園に変わることを検討しはじめる。

夫の熱烈な希望で超有名付属幼稚園を受験してみるが、準備不足で当然落ちた。お入学のためには、それなりの訓練が必要なことがわかった。

・勤めて二年たらずで広告代理店を辞めることにする。恵まれた条件だったが、それにみあう程のめざましい仕事ができなかったため。コピーライターとしての力不足を痛感する。

・フリーのエディター&コピーライターに戻る。雑誌の仕事は取材にかかる時間が多いため、主にコピーの仕事が多い。子供服メーカーのパンフレットなど、地味なところで楽しんで仕事をしている。営業努力を全くせず、細々と

・大学の常勤講師となる。収入が保証され、ボーナスも入るので有り難い。大学が埼玉県にあり、通勤に時間がかかるため超多忙となる。現在ますます多忙だが、原稿を書く仕事は自宅で行われる。そのため〝折りあらば〟家事、育児に狩り出される。妻子の無理解を嘆きつつ、家庭とのバランスは案外とれている。

・保育園をやめ、近くの幼稚園に変わる。同じマンションから通っている子どもが多いため、帰宅後も友だちと遊ぶことが多い。幼稚園もたいして好きではないが、お昼寝がないというのでまあまあ気にいっている。

した仕事ぶりなので、収入は代理店勤務の半分程度。家計に占める私の収入の割合はぐんと減った。今後の方向をどこにしぼるか模索中（思えば、私はいつもいつも模索中だが）。

個人的な家族史につきあわせてしまったが、表を見ると終始一貫していることが二つある。ひとつはウチの子どもはいつでもどこでも預けられるのが嫌いだということ。保育ママも保育園も幼稚園も、善意の保育者に恵まれているにも関わらず、喜んで出かけたのはほんの数えるほどしかない。友だちと遊ぶのが嫌いなわけではなく、保育園に行っていた時でさえ、帰ってくると同じマンションの友だちと遊びたがったが、あくまで自分のペースで、自分の友だちと遊ぶのが好きなのである。夜ベッドに入ってから眠りにつくまでの三十分間（赤ん坊のときからひどく寝つきの悪い子供だった）、〃ドラエもん〃と〃ど根性がえる〃と看護婦さん（大のお医者さんごっこ好き）について〃考えごと〃をするのが大好きとのことだから、つまりはそういう子どもなのだと思う。

もうひとつ、夫は、妻や子の妨害にも負けず、大学院生から大学講師へと地位を固め、本を読み本を書いている。ただし毎月誰かがお金を恵んでくれるのなら、働きたくないというのが口ぐせなので、ときどき私たちは「二人の役割を交換する」相談をする（今のところ、実りのない会話だが、実は神経細やかな夫は、家事がすばらしくうまい、ムムム……）

このふたつの〃終始一貫〃の中であちらこちらへとさ

まよっているのが私である。よくいえば私には柔軟性があり、柔軟な働きぶりが許されるだけの〝能力（脳力？）〟みたいなものもあったと思う。そしてなけなしの能力以上にあったのがまわりの協力である。引っ越す前は近くに住んでいた母の、現在はご近所の主婦の皆さんのおかげで、何とか仕事を続けている。母には甘えもあって赤ん坊をポイポイ預けていたから、私は兄弟の鼻つまみものだった。子供を幼稚園に通わせている今では、同じ幼稚園のやさしい〝お母様たち〟の「仕事のときはいつでも預かってあげるわ」という親切に頼っている。心から感謝していて、ご近所には足を向けて寝られない（ご近所は四方にあるから、私は丸まって眠っている）。

さて最後に、保育園から幼稚園への転園のことを書いておきたい。せっかく曲がりなりにも通っていた保育園をやめたのにはいくつかの理由がある。ひとつは子供が保育園を嫌いだったこと（嫌いならやめちまえ、というのが夫の方針である。娘が登校拒否をするようなら、学校になど行く必要がない、職を辞して自分が教えると公言している。社会に不適応なら南の島へ行って、二人で暮らすのだそうだ。私は東京に単身赴任して、お金を送る係が割り当てられている）。そして夫が子供をエスカレーター式の私立の学校に入れたがっていること。娘が生まれたときから「シラユリ」や「セイシン」の名前を口に出し、私の「イ、インテリはそんなことあんまり言わないもんだよ」という弱々しい抗議には耳もかさない。公立の小学校にはジャージーの上下を着た教師や乱暴な男の子がいて娘をなぐると信じている（その折りは十倍にしてなぐりかえすといっているが、恐ろしいことに、夫の先輩は子供の担任をなぐった上、プールにつきおとした。私は夫が獄につながれるのは見たくない）。受験勉強が知性を失わせるというのも持論で、これには私も納得する。夫は受験に勝ち抜き、東大に入ったおかげで知性を失ったらしく、私は無名の私立大に入ったおかげで、大変まっとうに元気に育っているもの。

こうして私は子供と夫の迫力に圧され、また私自身も

フリーになったことだし、子供につきあうことを優先しようという気になった。児童文学はもちろん、子供のテレビ、おもちゃ、幼児教育と、子供をとりまく文化は、私の興味の的である。そして当の子供自身への興味……。

娘が通っていた保育園への不満もあった。保育園には連絡帳もなければ、父母会もなく、散歩に出かけることもめったになく、一年間に一回も歌を歌うことも、絵を描くこともなかった。といっても園に熱意がないわけではなく、園長も担任も暖かく、子供への愛情にあふれているのだが……。散歩や課題がないのは、安全への配慮と子供に押しつけることを嫌ってのことだったようだが、やはり知的な刺激はあった方がよいと思う。下町の保育園で、お母チャンたちは自営業、パート、内職が多く、地域のコミュニティの中で働いていたから、父母会がなくても、コミュニケーションが存在していたのかもしれない。残念ながら私はいささか孤独だった。

土地が高価で人口の少ない中央区には、私立の幼稚園は一園しかない。ここは自由でのんびりした保育という評判とはうらはらに、私立小学校をめざす子供が集まっている。同じマンションから十人ほど子供が通園しているため、わが娘もこの幼稚園に通わせることにしたが、ここも受験を筆頭に問題が多い。入試のための塾はもちろん、ピアノにバレエ、リトミックに水泳、英会話にお絵描きと、週におけいこを五つも六つもこなしている猛児もいる。保育園も幼稚園も〝自由でのびのびした保育〟をかかげ、親たちも口を開けば〝自由でのびのび〟というのだが、〝自由〟も〝のびのび〟もめったなところには落ちていない。

私の模索には、子供の教育への模索が加わり、これまでよりいっそうあちらこちらへと動くはめになっている。

この夏、五歳の娘を伴って、ワシントンD・Cの弟（当時、在住一年）と、アトランタの友達（在住四か月）を、それぞれの家に訪ねました。

弟夫婦には二歳になる女児がいます。彼らのアパートメントは、プール、サウナ付、家具付の広い広い1D・K　光熱費・水道代込家賃680〃／月

エレベーターの間口は広く、通過階数をベルの音が知らせます。また、街の歩道と車道の段差には、必ずスロープがついていて、公共施設、美術館、博物館などには、車椅子のマークがあちこちにあり、メトロにはエスカレーターだけでなく、エレベーターもありました。

ハンディキャップの人に何人も会いました。義妹は、「乳母車をおして歩くのがとても楽なんです。」そして弟は、「やりたい事をはっきり言えば、何でも認めてくれる国だ。」といっています。

アトランタは、木々の緑と空の青さがどこまでいっても続いていました。〃国立公園の中の別荘〃のような家に、彼女は、三人の子どもと共に夫君の転勤に伴って、やってきました。

この四か月間、子ども達の現地の小学校、幼稚園への適応のフォローに精一杯だったと言います。言葉の壁は予想以上に厚かったと。「一番腹の立つ言葉は『そのうち慣れるわよ』。〃そのうち〃の間にどれだけの苦しみと悲しみがあることか。」と。そして、「やりたい事をはっきり言えないシャイな子は、なじむのに難しい国だ。」「今は夏休みで、ホッとしているけれど、九月の新学期から、また大変だわ。」と。

それぞれの異国での生活を垣間見て、感ずるところが多くありましたが、中でも家族の、特に夫婦の絆が強まっていることを感じました。

二つの家族の歴史にとって重大な意味を持つであろうこのアメリカでの生活を、夫婦の、子ども達の成長を、私なりに見守りたいと思うのでした。　（Y）

幼児の教育　第八十七巻 第十一号
十一月号 ©　定価 四〇〇円
昭和六十三年十月二十五日　印刷
昭和六十三年十一月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九－一九六四〇番
TEL・二九二－七七八一㈹
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

新教育要領の基本を知りたい人に、子どもをもっと知りたい人に、保育をリフレッシュしたい人々に贈る。

森上史朗対談集

人間・子ども・保育

中川李枝子・古田足日・角野栄子・佐伯　胖・竹内敏晴・早乙女勝元・昌子武司・稲垣忠彦・大場幸夫・鈴木とく・吉村真理子

童話作家や演出家、教育学者が語る新鮮な子どもへの視点、話題は保育から自分史、そして人生論へと進み、保育とはこんなに奥深いものかと思わずうなずき、保育への思いを新たにしてくれる対談集です。

A5判・276ページ

定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

オペレッタの教本がビデオになりました

今まで楽譜だけでは分かりにくかった点が、映像にすることによって、より先生方の気持ちに近づくことができました。数多くあるオペレッタの作品の中から９作品を選び、完全収録された保育資料ビデオです。

全3巻 たのしいオペレッタ

セット価格15,000円
カートンボックス入り
伴奏用カラオケカセットテープ付き(3巻セットのみ)

各巻定価5,000円

●第１巻(60分)

沼の宝石（11のオペレッタより）
ゾウのたまごのたまごやき（７つのオペレッタより）

●第２巻(60分)

宇宙人と星の花（オペレッタベスト４より）
ビクビク ウサギ（３つのオペレッタより）
小鳥のはねやさん（９つのオペレッタより）
ふしぎな空のおはなし（11のオペレッタより）

●第３巻(60分)

インディアンのおはなし（３つのオペレッタより）
花と猫探偵（オペレッタベスト４より）
タイム・マシン（９つのオペレッタより）

藤田妙子　監修・指導・作詞・作曲・構成

1916年、東京に生まれる。
師事した専門家　ピアノ　弘田龍太郎(父)、ルドルフ・シュミット（ドイツ国立音楽学校主任教授）作曲　池内友次郎（東京芸大教授）声楽　大熊文子(二期会)　舞踊　ドイツ・ベルリンのヴィクマン舞踊学校にて、モダンダンスを修む。江口隆哉、宮操子両氏につきモダンダンスを研究　美術　日本画・新美術人協会々員(昭和15年頃から約10年間)　現在ゆかり文化幼稚園副園長。

オ・ペ・レ・ッ・タ・の・指・導・書

子どものための オペレッタベスト4
藤田妙子　Ｂ５判　188頁　定価2,000円

幼児のための5つのオペレッタ
藤田妙子著　Ｂ５判　120頁　定価900円

子どものための9つのオペレッタ
藤田妙子著　Ｂ５判　178頁　定価1,600円

幼児のための3つのオペレッタ
藤田妙子著　Ｂ５判　104頁　定価850円

幼児のための7つのオペレッタ
藤田妙子著　Ｂ５判　144頁　定価1,200円

子どものための11のオペレッタ
藤田妙子著　Ｂ５判　232頁　定価1,900円

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館